讀賣新聞　2014年(平成26年)7月30日(水曜日)

スクールカウンセラー 増す役割

不登校の中3生 34%が相談

文科省 追跡調査

2006年度に中学3年生で不登校だった人の5年後を追った文部科学省の調査で、当時本人が相談したのはスクールカウンセラーらが3割超で、教員を上回った。不登校のきっかけは友人関係が最も多いが、複雑化しており、学校と外部が連携した支援が必要だ。

「教員」を上回る

調査は、06年度に中3で不登校だった約4万1000人を対象とし、このうち、約1600人が11～12年度の状況などについて回答した。同省は、1993年度に中3で不登校だった人にも98～99年度の状況を聞いており、追跡調査は今回が2回目。

不登校だった時に相談した相手などを複数回答で尋ねたところ、スクールカウンセラーなど学校にいる相談員が34・0%（前回調査では選択肢なし）と最多で、学校の教員29・5%（同）、病院・診療所24・1%（前回23・9%）などが続いた。

不登校だったことをどう思っているか（聞き取り調査から）

肯定的な意見	必要な期間だった。考える時間、自分と向き合う時間がいっぱいあった
	クラス全員から仲間はずれの状況で、行っていたら自分で命を絶っていたかもしれない
	フリースクールに通っていた時によい友人に出会った。場所を変えたのはプラスだった
否定的な意見	学校に通えばよかった。いじめがなかったら、もうちょっと学校に行きたかったし、行けたと思う
	中学のアルバムを見ても自分が写っていない。行事などに参加しなかったことが残念
	高校へ行けばよかった。好きな資格を取るには高卒資格が必要。定時制高校に行こうと思っている

電話で379人に実施。否定的回答138人(39.4%)、中立的回答98人(28%)、肯定的回答114人(32.6%)

フリースクールなどの民間施設も8・8%（同5・8%）あった。何も利用しなかったとの回答は22・5%と、前回調査の43・1%から大幅に減少した。

文科省は95年度から、学校や教育委員会にスクールカウンセラーを配置。06年度は1万158か所に配置されていたが、12年度は1万7621か所と1・7倍に増えた。

「教員と連携し、長い目で生徒を見守っている」と、その役割について話すのは、東京臨床心理士会の石川悦子副会長(55)。石川さんは10年近く、都内の公立中学校でスクールカウンセラーを務めている。

毎週金曜に出勤し、課題を抱えている子どもや保護者との面談に臨む。落ち着きがない、教室に入れないといった生徒がいると、一緒に給食を食べたり、授業の様子を見守ったりする。

石川さんは「以前は不登校の原因が分かりやすかったが、最近は一見、『普通の子』が増えた。内面に抱えている問題に耳を傾け、子どもが学校などとつながっていられるよう配慮することが重要」と話した。

「ネット」原因も

不登校のきっかけも多様になっている。調査結果（複数回答）では「友人関係」が52・9%（前回44・5%）、「先生との関係」26・2%（同20・8%）など学校関連が目立った一方、今回から選択肢に追加した「生活リズムの乱れ」が34・2%、「インターネットやメール、ゲームなどの影響」も15・3%あった。

不登校生の相談に応じているNPO法人「教育研究所」の牟田武生理事長(67)は「インターネットを通じ多数が同時に遊べるオンラインゲームに熱中し、生活リズムが乱れて不登校につながったケースなどが、調査結果に表れたのでは」と分析する。スマートフォンの普及もあり、最近はこうした子どもが増えているという。「ネット利用の危険性を学ばせ、過度にのめり込まないよう自主的にルールを作らせるといった対応が必要だ」と話している。

＊「教育ルネサンス」休みました。